

平田オリザ作

月がとっても蒼いから

登場人物

(中 沢 敬 一	…死んだ夫・登場せず)
中 沢 嘉 子	敬一の妻・喪主、元教員
中 沢 信 二	敬一の弟、元商店の経営者 七十才過ぎ
中 沢 正 一	敬一、嘉子の長男
中 沢 由 希 子	正一の妻
中 沢 修 平	敬一、嘉子の次男 四十代
中 沢 ゆ み	正一、由希子の長女、女子大生
高 橋 小百合	手伝いに来ている女性 三十才
白 井 翔 子	嘉子の最後の教え子 三十前後
篠 崎 潤 一 郎	葬儀屋
大 泉 作 太 郎	UFO研究会の人
江 川 加 奈 子	UFO研究会の人

凡例

☆—同じ数の台詞をほぼ同時に言う。

★—前の台詞に重なる。

／—あとの台詞に断ち切られる。

○—台詞の頭に、若干の間が入る。

∴—○より少し長い空白。

▲—そでにはけながら言う。

△—そでから出ながら言う。

場面の数字は、便宜上のもです。

実際の上演台本と異なる点があります。

秋の夜。

通夜の晩。

ひとしきり参列の客が帰ったところから舞台は始まる。

東京郊外、多摩丘陵の麓あたりの新興住宅地に、古くからある中沢家。亡くなったのは、この家の当主である中沢敬一。享年七七歳（舞台上には登場しない）。

敬一と、その妻嘉子は、どちらも長く中学の教師をしていた。

実際に舞台となるのは、広い和室。

おそらく普段は、ふすまで仕切られているものを二間続きで使っているのかも知れない。

舞台上手方向が台所と玄関が続いている。

舞台下手方向が祭壇のある部屋らしい。

奥に廊下があってもいい。

登場人物たちは、必然的に、祭壇と玄関、祭壇と台所を行き来するために、この空間を通らなければならない。

正一 ええ、
信二 一度、戻ってくるから。
正一 はい。
高橋 失礼します。

信二、高橋、上手に退場。
4・3・1

修平 ……
とんでもないな、
正一 まいったね、
由希子 でも、大変でしょう、これから、
正一 うん。
由希子 信介さん、なんて言うかしら。
正一 うーん、
修平 でも…生まれるもんなんだね。
正一 うん…でも…まあ、生まれるんだろう。

修平 うん。
…
嘉子 何、あなたたち？
正一 え？
嘉子 なんか、疑ってるの？
正一 いえいえ、そういうことじゃなくてね。なあ。
修平 うん。
嘉子 ダメよ、そういうこと考えちゃ。
正一 だから、考えてないって、
嘉子 あ、そう。
正一 ええ、
嘉子 だったら、いいけど。
正一 ……そんな、考えてませんよ、そんなこと。
…
嘉子 ねえ、修平はちょっと知ってたんだって。
正一 え？
嘉子 おじいちゃんのこと。

正一 え、本当？

修平 いや、UFOまでは知らないけどさ、星とか好きだったでしょ、

正一 それはね、

修平 あと、そういう話、よくしてくれなかった、子供の頃？

正一 そうかな、

修平 俺は、よく聞いたよ、宇宙人の話とかね。

正一 いや、記憶にないな。

修平 あれ、変だな、

正一 うーん、

修平 親父の本棚に、英語のSFがいっぱいあったでしょう、昔。

嘉子 ああ、ええ、

修平 あれをね、自分で読んでね、ちょっと子供向けにかいつまんで話してくれたんだな、お風呂の中とかで、

嘉子 あ、そう。

正一 あ、そりゃダメだ。

修平 え、なにが？

正一 まだ、俺の時は、うちで風呂たけなかったんだよ。

修平 え、そう？

正一 俺が、親父と風呂はいるような歳の時はね。

修平 うん。

ゆみ へー、おじいちゃんって、原書で読んでたんだ。

由希子 そりゃ、だって、英語の先生なんだから。

ゆみ でもさ、

嘉子 昔の人の方が、かえって原書を読んだのよ。翻訳なんて、いまほど無かったから。

ゆみ ああ、そうか。

嘉子 あの本はね、調布にいた進駐軍が帰っていくときにね、くれたの、親しかった家の人が。

修平 ああ、そうだったんだ。

嘉子 そう。何だか、自転車で走り回ってるうちにね、進駐軍のうちの子供と仲良くなったんだって、それで、毎日、本を借りてきてね、一生懸命読んでたの。戦争中は、全然英語の本が入ってこなくなっちゃってたでしょう、だから、もうすごい勢いで。

正一 そうか、

嘉子 子供の本でも、何でも。

正一 それ、僕が生まれた頃でしょ？

嘉子 そうそう。ああ、それでね、一度、おじいちゃん、泣いてたことあるのよ。

ゆみ え？

嘉子 夜中にね、本読みながら、泣いてるの。

ゆみ え、どうして？

嘉子 だから、何、読んでたと思う？

ゆみ えっと……『フランダースの犬』

嘉子 違うわよ。

修平 ああ、あれは泣けるんだよな。

ゆみ でしょでしょ、

修平 うん。

嘉子 違うの。

ゆみ え、じゃあ、何？

嘉子 『チップス先生さようなら』

ゆみ ああ。え、でも、あれで泣くかな。

嘉子 だから、おじいちゃんね、次の日起きてね、学校戻るって言い出したのよ……も

う一度、先生やるって。

ゆみ え、どうして？

嘉子 だって、私たち、ああいう頑固な先生になれなかったでしょう、戦争中に。

ゆみ ああ、

正一 本当に泣いたの？

嘉子 そうよ、

正一 あの親父が？

嘉子 うん。

正一 へー、

修平 信じられないね。

正一 だろ、

修平 うん。

嘉子 本当だって、

正一 そうですか、

嘉子 あなたがお腹の中にいたときだから、よく覚えてる。

正一 あ、そう。

……

嘉子 修平の話は、ずっとあとね、そのの。もう進駐軍がいなくなつてからだと思ふ。
修平 ええ、

正一 やっぱりだいぶ違うもんだね、六つ違うだけで、
嘉子 まあ、あの頃はね。

正一 だって、俺なんて、厳しい親父の記憶しかないよ。

嘉子 だから、変わったのよ。

正一 ええ、

嘉子 戦争で変わった人もたくさんいたけどね、でも、うちのおじいちゃん
は、どっちかっていうと、その先生やってなかった頃にね、変わったみたい。

正一 ああ、そうだったんですか。

嘉子 うん。

正一 子供だからなあ、判らなかつたね、それは。

...

嘉子 風景が変わっていくでしょう。進駐軍の家がバーって建って、その周りに、日
本人の家が、バラックみたいなのがね、どんどんできてく...あのときと、ニ
ュータウンが出来始めた頃と、二回くらいね、あんなに景色が変わったのは。

修平 二回も変われば、充分でしょう。

嘉子 ええ、

...

正一 まあ、親父もご苦労様ってところでしょう。
嘉子 うん。

信二、上手から登場。

4・4・1

ゆみ あれ、

嘉子 あら、もう帰ってきたの、

信二 ちゃんと送っていききましたよ。

嘉子 そう？

信二 タクシーのせて、

嘉子 ええ、

...

信二 思い出しましたよ、僕。

嘉子 え、なに？

信二 兄貴の、UFOの、

嘉子 え、だから、なにが？

信二 あのね、見たって言ってたんですよ、UFO。

正一 本当ですか？

信二 うん、いや、まあ、昔のことだからさ、UFOなんて呼び方もなかった頃だけど。

正一 え、それって、いつの話ですか？

信二 だからね、その、さっき話してた、兄貴が学校やめた頃かな。

正一 ええ、

信二 何だかね、自転車に乗っててね、変なものが空飛んでん見たって言うんだ。

修平 そうそう、その話ですよ。

正一 え？

修平 だからさ、それ、俺も聞いたんだ。

正一 だって、

修平 子供の頃だからね、親父の作り話か、本当の話か、ごっちゃになってんだけど。

さっきのSFの話。ごっちゃっていうか、判らないからね、そんなの。

正一 うん。

修平 やっぱり、そうですか、本当だったんだ。

信二 うん……いや、いまさ、そのバス通りから坂登ってきてね、向こうに月が見えるでしょ、ニュータウンの方に。

正一 ええ、

信二 それ見ててね、思い出したの。兄貴と一緒に店閉めてね、一緒に帰ってきたんだな、自転車押して、坂登って、そのときに、その話を聞いたんだ。

正一 そうですか。

信二 そんなときもね、嘉子には話せないなって。

嘉子 え、どうして？

信二 あいつは、こんな話信じないからって。

嘉子 そんな、だって、

信二 こーね、丸い、キラキラしたものがね、揺れてたらしいんですよ、空に。

……

信二 本当だよ。

正一 ええ、

信二 本当だよっていうのは、兄貴が本当にそう言ったってことだけど。
正一 はい。

修平 じゃあ、お父さん、その頃からってことかな、

信二 うん……いや、どうかな。まあ、関係はあっただろうけど。

修平 ええ、

正一 だって、学校（行ってるころは）から、本当に普通の先生だったじゃない。

嘉子 そうね。……たぶん、退職したあとでしょうね、きっと、本当に研究とかしてたんなら。

正一 ええ、

嘉子 だって、ほら、退職したあとも、よく散歩してたじゃない、しばらく。

正一 ああ、ええ。

嘉子 帰ってきてはね、あその丘が削られたとか、あの原っぱが無くなったとかね、うるさいの。

信二 へー、

嘉子 でも、おかしいのよ、そんなの。

信二 え、なにが？

嘉子 だって、そこらじゅう回ってるはずなのに、家庭訪問とかで。

信二 ああ、そうか。

嘉子 急にね、景色が気になるってことがあるでしょう。

…

修平 まあ、でも、本まで出してたっていうのはね。

正一 もう、いいよ、今日は、その話は。

修平 ……ああ。

正一 ね、

修平 そうだね。

由希子 片づけようか、

ゆみ はい。

正一 お母さんも、もう休んだ方がいいよ。

嘉子 ええ、

由希子、ゆみ、近くの茶碗などを片づけ、上手に退場。
4・4・2

…

修平 もう少し、飲みますか？

信二 いや、もういいや、俺も。